

# 転換の時代 岡山が開拓者に



「いい・のおお 1961年、大阪生まれ。大阪大大学院前期課程環境工学専攻修士。民間シンクタンク勤務。法政大教授などを経て2018年に岡山市に移住し現職。専門は環境政策。持続可能な地域づくりの実論。連続シンポジウムの第2回にパネリストを務めた。」

気候変動や廃棄物などの不特定多数を発生源とする諸問題が台頭してきた1990年代以降、ライフスタイルや社会経済システムの見直しの必要性が示されてきた。

「現代の大量生産・大量消費・大量廃棄型の社会経済活動や生活様式の在り方を問い直し、生産と消費のパターンを持続可能なものに変えていく必要がある」とされた。

次に、第2次環境基本計画は「生産と消費のパターンから脱却していくためには、生活様式や事業活動の態様を含めて社会全体にわたって大きな変革を行っていく」必要があるとし、「転換」という言葉を繰り返し使用した。そして、私たちは三つの道への分岐点(図参照)に立ち回るとした。

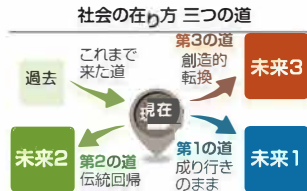
第1の道は、「これまでの大量生産・大量消費、大量廃棄の生産と消費のパターンを今後とも現在の社会の在り方を否定し、人間活動が環境に大きな影響を与えていなくなった時代の社会経済に回帰する道」第3の道は「環境の制約を前提条件として受け入れ、その制約の中で資源やエネルギーを効率よく利用する努力を行いながら、これまでの生産と消費のパターンを見直し、持続可能なものに変えていく道」である。

## 第3の道こそ

第2次計画は、この第3の道

への転換こそが持続可能な発展の姿であると示した。それは環境問題に限らず、持続可能な発展に関わるあらゆる社会経済問題、すなわちSDGs(持続可能な開発目標)の達成に向けても必要とされる。

集落の消滅、ストレス社会での健康障害、競争社会での生きにくさ、相対的な貧困、自然災害による深刻なダメージ、失業・雇用機会の不公平など、地域が抱える諸問題においても、社



会経済構造の見直しが求められる。

問題の根幹に「経済至上主義、効率性の追求、集中や規模の経済、近視眼的で目的短絡的な成果主義、外部性による生き方の疎外」といった社会経済の構造の問題があるからである。

さて、私たちは、新型コロナウィルスによるパンデミック、「世界的大流行」の最中にあり、アフターコロナに向けて経済活動を再開しつつある。そこで経済再生のみを優先するとしたら、それは「第1の道」への復

旧にすぎない。いくら非常事態とはいえ、いずれ行き詰まるだろう「第1の道」に戻り、そこから始め直すだけでいいのだろうか。根幹の危機を実感した今こそ、在宅での自衛生活やオンライン生活をすることで気づいた「何か」を大事にして、「第3の道」のビジョンを描き、これまでとは異なる方向に歩み出すチャンスである。

## 3 脱が重要

筆者は、ウィズコロナ社会では「3密」の回避がキーワードとなったがアフターコロナ社会では、「脱集中」「脱グローバル」「脱過剰」という「3脱」が重要だと考えている。

脱集中とは、新型コロナで明らかになった、高集中・高密度な大都市の脆弱性を解消することである。高度経済成長期以来、国土政策の課題となってきた過密の解消、そして過密地から過疎地への人口移動による「過疎」の実現を図るのである。

脱グローバルとは、国際的に活発に過ぎる人流、物流がパンデミックをもたらしたとを踏まえ、グローバルな物質の循環や人の移動を見直すことである。忙しく動きまわる観光や産地不明のアンフェアな取引を手放し、顔の見える関係づくりを築き、スローで高付加価値な交流・取引に転換するのである。

脱過剰とは、大量生産・大量消費・大量廃棄に依存する、物質的に過剰であるが実は豊かさといえない経済や暮らしを見直し、簡素だが豊かな暮らしへの代替を図るのである。

「令和時代の岡山宣言」で示された内容は、まさに「第3の道」であり、アフターコロナで目指すべき「3脱」の道である。岡山がフロンティア(開拓者)となっていくことで、日本や世界の持続可能な発展への貢献を目指す。力強い宣言である。